

福竜丸だより



都立・第五福竜丸展示館ニュース

発行 (財) 第五福竜丸平和協会
〒136-0081 東京都江東区 夢の島3-2
都立第五福竜丸展示館内
電話 03-3521-8494

福竜丸の心にも立ち返る…

武田 隆雄

「いまは、世界の人人はようやく核兵器の脅威にさらされていることがわかりました。どうしたならば、その災いが払い除けられるか、これが今日人類の問題になっております。これを解決せんがために私どもは歩きます。みんな歩くようであります。天を仰ぎ、地を踏んでお祈りをいたします。これがやがて、天地を動かす、世界を動かす大きい力になったときに、核兵器の効能はこの世界から消え去ります。」

その日をめざして歩きます。この藤井日達山主の教えのもと、私たち日本山妙法寺は全国を歩きます。毎年欠かさず、二月と五月に、第五福竜丸展示館を出発地に、三月一日の焼津、八月六日の広島に向け、日本山独自のやさやかな平和祈念行脚を続けさせていただいております。福竜丸から焼津の久保山愛吉さんのお墓へ、福竜丸から広島平和公園の原爆慰霊碑へとそれぞれ結ぶ二つの平和行脚を、毎年通じて歩かせてもらっているものにとり、原水爆禁止の国民運動を起こ

すきっかけをつくった福竜丸、廃船の憂き目にあいながらも、不思議としてよみがえり、いまも人々にさらに若者たちに核兵器廃絶と平和の尊さを訴えつつ歩いている福竜丸、その底知れない無言のエネルギーは、いつも僧衣の深く、肌身に感じとられ、行脚の出発にあたり長旅を支えてもらう「元気」を頂戴している思いがします。この「元気」こそ、久保山愛吉さんをはじめ核被害にあわれ、いまもなお苦しみに苦しんでいる多くの被害者の方々の思いと行動に後押しされて草の根の運動と連動し、ごみ捨て場に置き去りにされた第五福竜丸をよみがえらせたいエネルギーそのものです。長い間海底に沈んでいたエンジンを引き揚げ、福竜丸の船体のそばに安住の地を得させたのもこのエネルギーの働きによるものでした。

平和の運動に前向きに「元気」に取り組んでいくことが運動を勝利に導くものであると思えます。数年前、福竜丸の「水先案内人」でもある展示館の方から、ポロポロになった船体の小さな木片をいただきました。私は人間のお骨にあたる大切なものをお預かりした思いがしました。いまもその思いを胸に、福竜丸の歴史にご縁をいただいたことに感謝し、行脚を続けています。不動の平和運動の原点である第五福竜丸の元気の心に戻ることができるとき、誤りのない人生を私たちは歩むことができる気がいたします。この福竜丸の元気の心が昨年は五万人の草の根の方々を結集した「ストップ戦争法」の集いに結実し、さらには今年「三・一七沖繩・名護」に新たな米軍基地を作らせない大集会へと引き継がれました。五月九日、日本山妙法寺は、福竜丸を基点に広島へ平和祈念行脚をつとめさせて頂きます。

合掌

(日本山妙法寺僧侶)

広島へ平和行進出発

第五福竜丸の激励うけて

二〇〇〇年五月、今年も夏の広島へ三つの平和行進が、第五福竜丸の全身の激励を受けて夢の島から出発、いま全国の市町村に核兵器のない二一世紀への行動を響かせています。

五月六日、五百名を超える人々を結集して、原水爆禁止世界大会実行委員会が提唱する「二〇〇〇年原水爆禁止国民平和行進の出

発集会」が展示館前広場で行なわれました。平和協会からも川崎昭一郎会長が「平和行進は人々を勇気づける。原水爆のない未来へ第五福竜丸とともに航海を」と力強いあいさつを行ないました。東京都原爆被害者団体協議会の多くの被爆者が、「原爆被害に国家補償を」の青いタスキをかけて行進の先頭にたち、それを包みこむよう

に若者たちが手に手に被爆者の生と死とたたかい、被爆の実相を示すパネルを高くかかげ歩きました。運動の継承と二一世紀への力強い決意をその一歩一歩の歩みの内に示したさわやかな平和行進の旅立ちです。翌五月七日には、日本生協連が提唱、主婦連、地婦連、青年団、被団協、ユネスコ協会など七団体が賛同する「市民平和行進二〇〇〇」が第五福竜丸エンジンを前に出発集

奈良県のろう学校「マグロ塚」にふれる

その日、大石さんは、展示館の事務所の窓から何度も何度も館につづく外の坂道を見やっていた。早く見てもらいたいと大石さんが願っているものにも水やりきれいにした。大石



「マグロ塚」を前に奈良県立ろう学校のみなさん

さんが待つのは修学旅行で訪れる奈良県大和郡山南市の県立ろう学校の中学三年生、八名の生徒と八名の先生である。五月十日正午すぎ、いくつかの学校の生徒の見学であふれるような中を、少し遅れて姿を見せた子どもたちを、抱きかかえるように迎えた大石さんは、いつものように船体を見渡せる二階のデッキを教室に三十分近く自らの体験を心こめて語った。そして一ヶ月前、やっと展示館外に設置された「マグロ塚」に案内、「みなさんにはげまされてきました。ありがとうございます」と目をうるませた。

奈良県立ろう学校はもう十年近く毎年五月展示館を訪れる。生徒一名という年もあるが、いつも一時間近くにもなる説明を全身の手話で子どもたちに伝える先生は愛情に満ちている。生徒一人ひとりみんな明るく感性豊かだ。

三年前、築地にマグロ塚をとの大石さんの訴えにこたえて、プラスチックの大きなポトルいっぱい「十円募金」を詰め、メッセージをつけて大石さんに贈り、大石さんと「マグロ塚を作る会」を「本気にさせた」のはこの学校の生徒たちだった。展示館見学で学んだことを文化祭で発表、募金を訴えたというこの「ポトル募金」を前にして大石さんはテレビで全国に訴えたのでもあった。

「今年もマグロ塚に会える」とみんな胸をときめかしてきましたと引率の樽井先生、三五年にわたってこの学校の先生であり今年で退官という先生は「福竜丸は私の心です」と感慨深げだった。車椅子の生徒も身をのりだしてマグロ塚に触れ大石さんと目を合わせてにっこり。周辺にこやかな笑いとよろこびがはじけた。



日本山妙法寺「2000年平和祈念行脚」

会。反核法律家協会の池田真規弁護士が「いま市民社会の運動が政府を動かした。二一世紀は市民の世紀だ」と参加者を激励、地婦連の田中里子さんが「船のもとにエンジンをと力を合わせました。そこから市民行進が出発できました」と夢の島へ都民運動の報告をおこない拍手につつまれました。五月九日、うちわ大鼓の響きを福竜丸にしみこませるように打ちならし、久保山記念碑、エンジン、マグロ塚に核実験被害者の思いを重ね、読経と深々と合掌して、日本山妙法寺の「二〇〇〇年平和祈念行脚」が出発、修学旅行で早くから見学に訪れていた中学生も静かに見送りました。

「核管理」ということ

古関 彰 一

「核管理」ということが言われ始めたのはいつ頃からだろう。もちろん米国で最初に使われ始めて日本でも使われるようになったのだろうが、それは言うまでもなく、核、中でも核兵器を安全に管理する、という意味だ。

「管理」という日本語はかなり多用されている。とくにこのころは、「危機管理」だの「学校管理」だの、はたまた「自己管理」と、なにかと「管理」が使われる。

その一方でこの「管理」という言葉に反感を感じる人も多い。とにかく「管理」と聞くとどんな管理であれ反対する人すらいる。が、んじがらめの管理社会に生きているのだから無理もない。その気持ちにはなんとなくわかるような気がするが、私はそれほど「管理」に敏感ではない。

しかしそんな敏感な人たちの間でも「核管理」はさして話題にならない。むしろソ連が崩壊し、核保有国が「核管理」を十分にできなくなった怖さを経験したり、核保有国が、核開発の「疑惑」を空から偵察し、査察までしてくれると、「核管理」という言葉は人類に安心感を与える心地よい響きをすら持つてくる。

しかし、この「核管理」という言葉を聞くと私はなんとも言い難い気持ちになってしまふ。とにかく核兵器そのものがどこにどのような状態で管理されているのかわからないのであるから、管理の仕方がどうのこうのといったことではない。そんなことに「一般人」は言及できない。そればかりか、他国に知らせないことに核兵器の存在意味があるのだという。このようにして相手国に脅威を

与えることによって戦争を防止することを核抑止というのだそうだが、個人の視点から見れば、それは脅威であるとともに不安でもある。このように核が管理されていることは、核が管理されていないより、核によって人類が管理されていることになる。

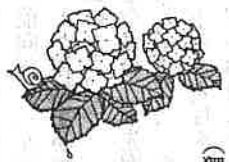
私が「核管理」という言葉にどこか引かかるのはそのためである。核管理とは、核独占国による人類管理の意味なのではないのか。

究極の管理なき社会は、まさに自然状態の社会である。しかし、自然状態、つまり国家なき社会はあまりにも危険がともなう。私など一日たりとも生きていけそうにない。そこで人類は共同体を、そしてその延長上に国家を作ったといわれる。

「管理職」「管理人」なども本来は、対象は者だけであつたにもかかわらず、いつの間にか人も含むように観念されている。私は、管理の対象が物だけであれば、あまりどうこう言わないことにしているのだが、最近は何物を通じて人を管理することが多くなった。「核管理」の場合は、核を対象としていることは自明であり、さして問題にならないが、これも核を通じて人、人類全体を管理しているのではないのか。

核兵器は、私達の生活から遠い存在である。しかし、日常うつつうしい「管理」の延長に、否その頂点に「核」があり、人類に対して脅威と不安を与えている。

核戦略を支持する側の人々から見れば、それによって地球の平和と人類の安全が守られている、ということになるだろうが、核そのものが人類にとって必要なモノなのかどうか問われる時代だ。



(獨協大学)

「被爆者とともに」は世代をこえて

鍋島 聖 民

二〇世紀最後の平和行進は五月六日、夢の島の第五福竜丸展示館前から広島に向かって出発した。昨年、ガン手術の直後に平和行進を歩いた高木留男さん(八十一歳・広島被爆)の元気な姿を見つ

けることができた。それだけではない。東京都原爆被害者団体協議会(東友会)に所属する被爆者が十数人参加していた。

子に、「こんな大通りを原爆の写真を持って歩くのは、恥ずかしくないかい?」と、意地悪な質問をぶつけてみた。彼は少しはにかみながら、こう答えた。

「全然平気です。これってカッコイイことなんだ」

被爆者たちは前を向いて黙々と歩く。土曜日の夕方で賑わう銀座の繁華街では、さらに一〇人ほどの被爆者が加わった。宣伝カーから東友会事務局長の飯田マリ子さん(長崎被爆)が訴えかける。

「プルーのタスキをかけて歩いてるのは広島・長崎の被爆者です。被爆者は生きているうちに核兵器をなくしてほしいと願っています」

「若者がかかげる原爆の写真パネルを見てください。二度と繰り返してはならないのです」

う二十一歳の女性も、臆せずパネルを差し延べていた。左足を少し引き摺りかげんに歩いていた岩沢弘さん(七十九歳・広島被爆)は、「初めてだった。が、思い切って参加してよかった。ずっとパネルを持って歩いている若者に頭が下がる」と、興奮気味に語っていた。

この日の全工程十二・二キロを歩き通した三宅信雄さん(七十一歳・広島被爆)をはじめ、十四人が終着地点にたどりついた。被爆者たちは、「膝が痛いので途中で抜けようと思ったけど、誰も抜けないものだから……」「あら私も」「じつは俺も」などと言って笑い合っていた。

意外なことだが、東友会の被爆者が平和行進に総勢二十一人も参加したのは初めてだという。

飯田事務局長は、行進への正式な招きがあったことも理由のひとつにあげながら、「二〇世紀の最後、区切りの年に何かをしないではいられない気持ちだが、多くの被爆者にあるのだろう」と話す。この三月、東友会の伊藤壯会長がガンで亡くなった。七十歳だっ

た。ほかに、相次いで亡くなったり、入院したりする仲間の被爆者が多い。

核兵器はいまも存在し、未臨界核実験などが繰り返されている。日本政府は、密約を交わしてまで「核の傘」に寄りかかっているし、原爆被害への国家補償を拒絶したままだ。被爆者たちにとって、自分の体が動くうちにーの思いは、ますます強くなっているようだ。

歩きとおした被爆者のひとり、は、「ささやかな行動でも、つづけることが大事なんだ」と噛み締めるようにつぶやいた。その言葉と同じ感想を、パネルを掲げた若者のひとりも述べていた。

五十年以上のへだたりのある世代の気持ちだが、びつたり重なり合ったように見えた。

(フリーランス編集者)

【松谷裁判】 長崎の被爆者・松谷英子さんが、原爆症認定を拒む厚生省を相手に起こした裁判。一審、二審では松谷さんが勝ったが、国が控訴したため現在は最高裁で係争中。東京でも、東数男さんが同様の主旨で東京地裁に提訴している。